



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 北海道大学法学会記事                                                                        |
| Description      | 雑報                                                                                |
| Citation         | 北大法学論集, 59(1), 291-292                                                            |
| Issue Date       | 2008-05-30                                                                        |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/33827">https://hdl.handle.net/2115/33827</a> |
| Type             | other                                                                             |
| File Information | 59-1_p291-292.pdf                                                                 |



## 北海道大学法学会記事

〇二〇〇七年二月二三日（木）午後三時より

「ジャン・モネ、プラン、アメリカあるいは欧州統合のもう一つの起源」

報告者 遠藤 乾  
出席者 三八名

ジャン・モネ (Jean Omer Marie Gabriel Monnet) は、一八八八年に生まれ、一九七九年に没した。九〇余年にわたる彼の人生の間、世界は大きく変わった。二〇世紀初頭までの欧州の域内平和と相互依存は、域外における帝国支配と戦争を伴っており、やがて域内を主舞台とした二度の世界大戦に取って代わられた。この経験は、人類史上初の普遍包括的な国際組織である国際連盟や国際連合を世紀前半に産み落としたが、その後を彩ったのはむしろ、米ソ間の冷戦とヨーロッパの分断であった。

またこの間、帝国主義と貴族の時代は、ナショナリズムと民主主義の時代へと転じ、英国のヘゲモニーは次第にはあるが明瞭に米国のそれへと道を譲った。その米国の指導の下、戦後の西欧は、国民国家再建と国際統合を同時に追求する。

高校も卒業せず一六歳の時にコニヤック商人の家業を手伝い始めたモネは、伝統的なエリートコースからはかけ離れた人生を送ったが、波乱に満ちたグローバルなキャリアを通じて、この変わりゆく世界に深い刻印を残した。その彼の経歴については、いささか誇張されがちだがやはり目を見張るものがあり、それ自体じつくりレビューするに値しよう。ただしここで指摘するべきは、彼の戦後のヨーロッパ統合への貢献はそれ自体非常に重要な分析対象ではあるけれども、「ヨーロッパ（平和）の父」としてのイメージにばかり目をとられると、結果としてモネがどういう人物だったのか、何をどのようにに成し遂げたのかが見えにくくなるという点である。

モネが欧州石炭鉄鋼共同体 (ECSG) の元となったシューマン・プランにかかわったのは、彼がすでに六二歳となった一九五〇年のことであった。それまでの四六年にわたるキャリア

は、彼にどのような影響を与え、いかなる資源や傾向をもたらしたのか。とりわけ、モネが公的なキャリアを第一次大戦において開始した点、それが英仏（伊）の戦時共同調達という形を取った点、そして国際連盟創成期や第二次大戦中はもちろん、見ようによつては大戦後にも同様の行動に着手した点は、彼とその時代を考察する上で、少なからぬ意味を持つように思われる。また、仏計画庁であれECSCであれ、モネの戦後のリーダーシップは、ニューディールの理念と人脈に密接に関わっている点、さらに、米国の覇権とテクノクラシーの二重の興隆と軌を一にする点においても、際立った特色を持っている。これらはみな、二〇世紀の国際関係の変容、すなわち国と国との「統合」のみならず、越境的な問題管理としての「グローバル・ガバナンス」の成立ともかかわっているため、モネを、とりわけ「ヨーロッパの父」として象徴化される前に遡って検討することには、一定の意味があるように思われる。そこで、本発表では、ジャン・モネという人物に焦点を当て、二〇世紀史のうねりの中に位置付けながら、国際政治の問題として意識した。

報告ではまずモネの人生を簡略に振り返った後（第二節）、彼の第一次および第二次大戦における戦時共同調達の試みを振り返り、その特質とスタイルについて考察した（第三節）。次に、

戦後復興におけるモネの計画主義（プランニスム）を米国におけるニューディールとの関連で位置づけ（第四節）、さらに、モネの社会的上昇を西洋社会におけるエリートとの転換と結び付けて検討し（第五節）、最後に、これらが持つヨーロッパ統合（やグローバル・ガバナンス）への含意を明らかにした（第六節）。